

Title	実践女子大学図書館常磐松文庫蔵 奈良絵本『おちくほ』翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1985
Jtitle	三田國文 No.4 (1985. 10) ,p.52- 75
JaLC DOI	10.14991/002.19851000-0052
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19851000-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

実践女子大学図書館
常磐松文庫蔵

奈良絵本『おちくほ』翻刻

石川 透

例言

一、本翻刻は、実践女子大学図書館常磐松文庫蔵奈良絵本『おちくほ』（春之上・中・下）、同文庫蔵奈良絵本『おちくほ』（秋上）の二本から成る。

一、この二本は、チェスター・ビーンティ図書館蔵『四季さうし』（夏之上・中）、市古貞次氏蔵『佚名物語』（三冊）とともに、別本『落窪の草子』（仮称）の一部を構成するものと考えられる。尚、以上四本を含めた、別本『落窪の草子』についての考察は、別稿に譲りたい。

一、二本の書誌は以下の通り。

『おちくほ』（春之上・中・下）

奈良絵本。袋綴、三冊。竪二九・九糎、横二二・四糎。料紙、鳥の子紙。紺地金泥草木模様表紙。表紙左上の題簽に「おちくほ 春之上（中・下）」とある。内題なし。墨付、上・二五丁、中・二五丁、下・二二丁。每半葉一〇行。字面の高さ二三・五糎。挿絵、上・八頁、中・七頁、下・七頁。

『おちくほ』（秋上）

奈良絵本。袋綴、一冊。竪二九・四糎、横二一・八糎。料紙、鳥の子紙。紺地金泥草木模様表紙。表紙左上の題簽に「おちくほ 秋上」とある。内題なし。墨付、三三丁。每半葉一〇行。字面の高さ二二・五糎。挿絵二二頁。

一、翻刻に際して、底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に改行、読点を多く施した他、（ ）をもって丁数やママを示した。

一、最後に、翻刻を許可された実践女子大学図書館に、厚く御礼を申し上げます。

おちくほ 春之上（題簽）

かしこき御代に、つかうまつれる人は、おほかめれと、すくよかならん事を、すゑにのこして、こと草のたねにもせまほしと、おもへる人こそは、ありかたけれ、定敦の大しやう大式などか、ふるき都の事をいへるは、さらなり

ときうつりて、いまは、人の心もいまめかしく、よろつ、わかやかなることのみ、おほかりけり、されとも、御まつりことは、みさばにして、いにしへにかはるとも見えす、わかきかんだちめにいたるまで(1才)、その才、優ならんことをのみ、おもひて、その業、いつしかけちめもみえず、聞えありぬ

こゝに、なか岡にすみ給へる、うちさばの中なこんかねかたと、聞えし人、おほしけり、御父は、御とし四十あまりにて、大納言をかけさせ給ひて、ほとなく身まかり給ひぬ、御母は、准後の御はらからにて、おほしけるか、このちうなこんとのを、御かた見とおほして、玉ゆらもはなちたまはず、かいつかせ給ふほとに、なへてならず、おいたち(1ウ)給ふにしたかひて、さいかく、ゆふにおほしけるほとに、御とし十八歳のすゑつかた、権中納言たかのふのきやうと、聞えし人の、ひめきみを、むかへさせ給ひて、かいつかせたまふ(2才)

〔挿絵・第一図〕(2ウ)

されとも、ちうなこんとの、御としなかはもすきたまへれとも、御子ひとりもいませざりければ、なかきよのいさどきにも、これをのみなけき給ひけるか

あるとき、御は、きこえ給ふやうは、御身いとけなくして、父におくれ、いかばかりのおもひに、しつみしかとも、かたみとおもひて、とかくとおほしたて、かくのみなりぬ、今は、や、御身もなかはすきさせ給へは、そのあと、しるへきものなきこそ、ほいなけれ、すゝるに、これ(3才)のみこそは、老の身のまとひなれど、うちなけき聞えければ

中納言殿、北のかたへおほせらるゝは、なき子をねかはんには、ほ

とけに申さんにはしかして、てうほうしの御ほとけへ、まうて給ひて、いのりこたせ給ふほとに、院主の僧も、けんたく、いみしき僧にて、おほしければ、御ねかひ、しやうしゆし給ふへきよし、いとたのもしけに、きこえけるほとに

うちよろこひて、とし月をあけさせ給へは、よにありかたき、ひめ君いて(3ウ)き給へり、まことに、卍花の玉よりも、ありかたき事におほして、かそいろのてうあひは、いやめつらかにそ、見えにける、月日にしたかひて、世にいつくしく、おいたちたまふほとに、御とし十二さいにそ成給ふ

ちうなこんとの、かはかりいつくしき姫なれば、なみならん人には、みせましとそ、おほしける、御めのと、かいしやくなと、ひめもすにまとゑさせて、かいつき給ふか、この姫君、つねに、ことをすかせ給ひて、しのに、是(4才)もてあそび給ふほとに、たくひなくそ聞えける、くきやう、てんしやう人、きゝをよひ給ひて、いかならんたよりもかなと、おもひまとはぬ人は、なかりけり(4ウ)

〔挿絵・第二図〕(5才)

こゝに、右大臣かねざたごうの猶子に、おちくほのちうしやうと、聞えし人、おほしけり、此人は、かたちめてたきのみならず、さいかくいみしき人にて、おほしければ、院内の御おほえも、他にことなれば、かそいろの御てうあひも、よのつねならすそ聞え給ふ

よろつに、心つかひのやさしききみにて、おほしけるか、すてに、御とし十七さいに成給ふ、やよひのはしめつかたのころほひなるに、おほきまちのふるき御しよを、あらため(5ウ)させたまひて、ひんかしおもてに、そのをしつらひ、あげくれ、この御しよにのみ、うちこもりおはして、ともとちのわかかんだちめ、うちかた

らひ、物して、あそひくらし給ふか

はつ花さくらは、なこりなく、ちりうせぬ、おそさくらの、きのふけふ、さかりとみえけるを、人々は、あはれと見給ひて、春の宵の一時を、千金にもかへしといへるは、いとおもしろしとこちて、ゑいにかたふきては、けうある詩などを、すんして、あそひたまふに(6才)、東風の、いとほしたなく吹来て、木すゑの花をちらしければ、中将との

しはしとて、とむるかひなき、さくら花、名こりもあらず、かへる木の本

春宮佐信方

名残あり、またこん春も、たのまれず、あらしにつるゝ、花しおもへは

かやうに、うちたはふれさせ給ひて、ひめもすぐらさせ給ふか、おりふし、一の藏人すけかぬは、襖狩衣あはせにて、太刀をはき、きよらかにいてたち(6ウ)、一品の御所へ、まいり給へりけるか、つるちのほかへとをりあひけるか、人のけはひのきこゆれば、うちまはりて、入てみければ、御めのとの六位は、見て、人々、かう／＼なんと、きこえければ、うち入て見るに、さしき、けうあるさまなりちうしやうとの、こはいかにや、なにとしてか、いり給ふやらんと、きこえ給へは、すけかぬは、かう／＼なんありて、とをり侍るに、いとうらやましき、御けはひのやうをきゝてこそ、たちいり侍ると、たかひに、こ(7才)よなくすして、ともにあそひぬるほとに、夜もはやうちふけぬと見えて、ちかきいゑの鳥の音も聞えければ、をの／＼帰り給ふ

春宮のすけ、あすは内にてあひなんとて、いとよろほひて、たち給

ふ(7ウ)

〔挿絵・第三図〕(8才)

さて、かへり給ひければ、中将も、丁のうちへ忍ひいらせ給ひて、ふし給ふに、あくれば、内へ人々あつまり給へとも、ちうしやうは、いまた、おきもあからせ給はず、うちふさせ給ふほとに、けふは、春宮のみや、かもへ御しやさんと、聞えければ、かந்தちめ、てんしやう人、供奉ぐがしたてまつり給ふへきよし、いらなく、つけきたりければ

御めのとのたいふのつほね、丁のうちへいりて、やゝと、おこしたてまつりければ、おとろき給ひて、なに事にやと、の(8ウ)給ふほとに、めのと、御とものよし、聞えければ、けに、さそありぬへし、よひにしつみて、夜はなかはとこそおもひしなりとて、おきあからせ給ひて、物し給ひて、御手水つとめて、なをしさうそくし給ひ、かうふりをめし、いとあてやかなるよそほひは、やさしくぞ、見えにける

御ともには、六位の進、わらはなど、くし給ひて、大炊の門へいりて、見たまへは、かந்தちめ、殿上人、うへわらは、なまめかしく出たちて、いろめきあへるも、ひか／＼しくそ(9才)、うちみえぬ、御くるまのさきには、あやにくなるさうしきの、うちわらひて、いかめしけなるも、ことなり

君よりのおほせにて、おちくほの中将、宰相さいしやうのちうしやう、新三位の中将、騎馬きばにて、御ともし給ひにける、みちすから、御くるま、物しつかに、やりたてまつりける(9ウ)、よそほひ、きら／＼しくぞ、見えにける(10才)

〔挿絵・第四図〕(10ウ)

〔挿絵・第五図〕(11才)

午の刻はかりに、社頭に、御くるま、とゝめはんへりける、所務をはしめて、をのゝ、あさ露にそほちて、はるかに、御むかひにま
いりけるか、御ともし侍りて、いらせ給ひぬ、御くるまより、みす
かきあけて、おりさせ給ふ

御としは、いまた十二三さい、容貌うつくしく、あてやかに、らう
たき事かきりなし、にほひ、しめやかにうちかはりて、忍ひたまへ
る、御けはひは、ありかたくそ、みえ侍りぬ、かくて、御まへに、
まいらせ給ひて、御きね(11ウ)むとも、御こゝろしつかにそ、見
えさせ給ふ

官領あきのり、藤の花の、咲みたれたるを、たてまつりて

いく春を、そめいたしけん、藤か枝の、花のたもととは、千世もか
はらし

それゝと、聞えさせ給へは、おちくほは、きと、手をしつかせ給
ひて

色ふかき、わかむらさきの、藤の花、君か袖のみ、なかくそむら
ん

君は、えいかんおはしまして、さまゝの禄(12才)をそ、給はり
ける

扱、みやうしんを、いさめ給はんとや、おほしけん、御くわんけん
あるへしと、おほせられければ、うけたまはりて、おちくほのちう
しやうは、琴をひき給ふ、さいしやうの中將は、琵琶を引給ふ、新
三位のちうしやうは、ひちりき、藏人のへんは、よこ苗なり

おりしも、春のことなれば、双調に音をしらへ、手をつくして、さ
まゝのかくをこそは、あそはしける、峰ふきおろす春風の、松に

吟するそのひき、いつれを(12ウ)わくへきやうそなき、こくら
くしやうとのをんかくも、かくやとそ、おもひしられにける

きせんのとうそく、男女、ちやうもんせむとて、神庭にくひすをつ
き、かうへをうなたれ、耳をそはたてゝ、これをきくとはいへと
も、更に、清濁をわけてきける人もなし、まして、呂律もわきまへ
ず、されとも、胡巴琴を弾せしかは、魚鱗躍逆、虞公歌を発せし
かは、梁塵動揺して、ものゝ妙を窮るときは、しせんと、感をもよ
ほす、ことほりなれば(13才)、諸人も堅て、満座、奇異のおもひ
をなしにける

明神もなうしゆうや、おはしましけん、内陣の斗帳も、ゆるくはか
りにそ、見えさせ給ふ(13ウ)、をのゝ、きとくにおほしめし、
御しんかうは、かきりなし(14才)

〔挿絵・第六図〕(14ウ)

〔挿絵・第七図〕(15才)

かくて、日のあしも、夕陽にめくらせたまへは、くはんきよおはし
ましけり、ちうしやうも、かへり給ひて、御さうそく、ぬきちらし
て、しとねのうへに給ひて、あら心くつしやとて、あしさしのへ
て、なて給へれば、めのとのたいふ、さしよりて、御あしをなて
ゝ、くつをやすめ侍りぬ

かゝるほどに、麗景殿に、めしつかへける女はう、とのものかみ、
女御の御せうそこ、もちてきたりて、ちうしやう殿に、まいらせけ
れば、きのふの御物まうてに、さ(15ウ)こそ、御こゝろくつし給
ひなん、また、家つとは、なとおそなはり給ふそや、ちと、いらせ
給へなど、いとけうありて、聞えにける

中將は、主殿に、けふは、君につかへて、こゝちならぬそや、くれ

まとひて、かはかりのふせいなりと、聞えさせ給へは
とのも、聞えけるは、いつまで、君も、ひとりすみにて、おはしま
し侍へるへき、しかるへきひめ君をと、みなくたつねさせ給へと
も、君は、いろこのみふかく、わたらせたまへは、いつれか、御心
にかなひはんへらん(16才)と、御心つかひ、さまくたつねに、おはし
けるそや、かくおはしけるなかにも、おもひよりはんへる事こそさ
ふらへ、かねかたのちうなこんとのの、ひめきみこそ、世にたくひ
なく、いつくしくまませ、かそいろの御いとをしみも、よのつね
ならず、なみくの人にはみせし、女御、后妃にも、まいらせはや
とのみ、聞え侍るそや、いかおほしきさふらふにやと、申ければ
ちうしやう、きこしめして、さる事とは、わかきかんたちめの、ほ
のめきしを、きくけれ(16ウ)とも、たゞ、よのつねにきくしな
り、しかるへきたよりもあらは、心さしをも聞えはやと、のたまひ
ければ

とのも、たかく、をとなさせ給ひそ、やかて、ちうなこんとのへ、
まいりはんへるおりのさふらへは、申聞ゆへしと、さゞやきけ
るほとに、中将、よき事にし給ひて、ふかくちきりてぞ、かへさせ
給ふ

そのうちよりは、人しれす、うちこもりましくて、ふみをかゞせ
給ひて、主殿か、きたれるをそ、まぢわひさせ給へりける

さるほとに(17才)、中納言殿は、父うへのねんきにあらせ給ふ
とて、法勝寺の慈延僧都を、しやうしさせたまひて、一七日かあい
た、八軸の妙典をそ、よませ給ひける、導唱の御こゑ、いとありか
たく聞えさせ給ふ、されは、尊霊も、このくとくにより給ひて、一
仏乗のうてなに、いたらせ給ひなんとぞ、見えにける、右大臣殿よ

り、御追善ありけるも、いと有かたし
なきあとの、かた見にのこる、たらちねの、御法のふねの、ひは
やとくらん(17ウ)

かくて、結願もおはりぬれば、導師へは、しろき御裳をそ、ひかせ
給ふ

かくて、ひめ君は、打こもりてのみおはしければ、御母うへは、め
のとにおほせけるは、ひめ君をくして、下のたいへまもり侍りて、
なくさめよかして、の給ひければ
ひめきみへ、このよしを聞えければ、けにも、物さはかしからぬ、
いとしつかなるところにこそはあれ、これにのみうちこもりぬれ
は、えさらぬ事のみ、おもひかさなりて、かきりなく心くるしきそ
や、母上(18才)のおほせなくは、おもひたつこともあるへから
ず、はやくゆかはやと、おほせければ

めのと、こは、いらなく聞え給ふ物かなとて、女はう達、はしたな
と、きらくしく出たせて、ひめ君をは、こしにうつしまいらせ
て、忍ひやかに、御里の御所へそまいり給ふ、ひめきみは、人やり
ならぬこゝちにて、いそぎ給へは、めのとは、いさゞか、さぎにた
ちて、物なとりつくるひて、いれ侍りける

この御所は、あつま屋つくりにて、四ほう、はれらかなり、おはし
(18ウ)ますへき床には、みすまきあけて、あやのきちやうをかけ
て、かけふかくしつらひたり

このうちへさし入給ふ、さまくたつねのゑ、あそひなとをし給ひ、ひ
わ、ことをたんしさせたまひて、あそひ給ふほとに、いつしか、え
ならぬこゝ地し給ひける、みなみおもてのそのへ、いてゝ見はやと
て、上らう女はう、五六人めして、はしあちかく、まとあしたまひ

て、庭のけしきのあはれなるを、見給ひなとして、うちとけてあそひ給ふに、のきはの(19才)梅の、いとにほやかに、こちふく風にほひくるも、やさしくおほしけるに、折ふし、うくひすのきたりて、ほつえに、かなたこなたと、たはふれて、こゑ、いとひなひやかに、さえつりけるも、あはれにおほしけるか、かくそ聞えさせ給ふ

梅かえに、しはしやとかる、うくひすの、こゑもひなひて、あはれにそ聞

めのと、かくそ

鶯の、梅のほつえに、ほのめくを(19ウ)、ゑにもうつして、み

んよしもかな

かくて、こゝにのみ、うちこもりておほしけるか、主殿のすけか、こゝにおほしけるをきゝて、よきたよりにこそあなれと、よろこひて、おちくほの御しよへいりてければ

おりふし、ちうしやうは、このほと、方違なたがたしたまひてけるか、けさ、あさまたきに、かへらせ給ひて、母屋のうちに、うたゝねしておはしけるか

めのとにあひて、聞えけるは、ちうしやう殿に、しかるへからん人を、みせたてまつらはやと(20才)、人々は、事のたえまには聞え給へとも、此きみは、いろこのみにてましませは、なみ／＼の人人とは、よも見給はし、大納言しけみちかとのゝひめきみは、世にきよけなるひめ君にて、おほしければ、かそいろの御かしつきも、あまりあるほとなり、もとより、いみしと、おほしめしければ、この君をたてまつらはやと、おもへとも、いまたおさ／＼しければ、つゝるに、ちうしやうとのにもつゝみぬ、此人の外には、さして、心に

くきかたもきゝ侍らす(20ウ)

とかくと、もとめ侍る所に、うちさはの中なごんとのゝひめきみこそ、御かたち、めてたく、あいきやうありて、いみしきひめ君にて、おほしけるよしを、つねに聞侍りしほとに、いつそや、御つかひにまいりしおりふし、ひめ君の御かたへまいりて、見たてままつりしか、まことに、いつくしともいはんかたなし、されは、この君を中将殿にあはせたてまつらは、いかばかりめてたからんと、おもひて、御そより、たよりをもとめて(21才)、きゝさふらへは、父うへは、女御にまいらせはやとのみ、おほして、そのつくりひのみ、ひたすらし給ふよし、きゝ侍るか、いかゝせんなき事にはあらずやと、いひければ

めのと、申けるは、けにも、ゆかりの御すゑに、つかへ給へればこそ、かくまていみしくきこゆれ、一もんの人々も、めやすき人あらは、みせたてまつらまほしと、あけくれ、わひさせ給へとも、いまにもあらず、ひ(21ウ)とりくらし給ふとも、こよなう、のとけくやおほしめすへき、いかにものはからひてたへかしと、しみ／＼と、うちたのみきこえければ

とのもゝうちらはらひて、世はかたはすなる物かなとて、それよりおくへいりて、見ければ

ちうしやうとの、おきさせ給ひて、いかにや、主殿、このころはなとか見えさりつるそや、いかにしてか、とたえし侍るそと、の給へは

されは、このほとは、わか里におきはんへるむすめの、かせのこゝ地とて、いたはり侍るよし(22才)、つけきたりさふらふほとに、

よるつとりちらして、さとへおりまいらせ、さいつころ、かへり侍るそや、かならず、おもく見え侍るは、かろくあるへき事なればにや、ほとなく、さめ侍るほとに、みしろくありしに、今は、いさゝか、心うれしく、かへりまいり侍る也、されは、いつそやほのめきし人は、此程、さとの御所へおりたまひて、あそひ給ふなるよし、しらするもの侍るそや、されは、いまこそよきたよりなれば、まいり侍るへし(22ウ)、御せうそこ給はりなんと、いへはちうしやう、よろこひたまひて、さくらかさねのうすやうに、いとけうあるやうに、わひ給ひて、かゝせ給ひ、主殿にそたまはりける(23オ)

〔挿絵・第八図〕(23ウ)

主殿は、それより、ひめきみのおはします御しよへまいりけるめのとほ、出て、こはいかに、なにとしてきたり給へるそや、めつらかにこそおほゆれとて、よろつさしをき、かしつき給ひ

とのも、いひけるは、御身にさゝやくことのみあり、こなたへと、いさなひければ、丁のうしろにいりぬ、此ひめ君、御かたち、めてたくおはします事を、おちくほの中しやうとは、きこしめて、いとたえかたけにおはしけるか、我身、此御たいへまいる(24オ)よしをほのきゝ給ひて、せうそこをひそやかに給はりしなり、いかにもして、この人にあはせたまつるやうに、心つかひをし給へと、聞えければ

めのと、此ひめ君をは、父うへは、女御にまいらせはやと、おほしければ、いつかたより申させ給へとも、いさゝか、いらへもおほしまさぬ、みかとへまいらせ給はずは、春宮へたてまつり侍らんと、のたまふそや、あまりいとをしみ給ひて、御心はらしに、いとしつ

かなれば、さとのしつら(24ウ)ひやおほし候へとて、このころ、此御しよにおはしけるそや、いかゝ侍らん、まいらせてみ給へと、いへは

とのも、よろこひて、めのとゝつれて、ひめ君の御そはちかく、まいりける(25オ)

おちくほ 春之中(題箋)

ひめ君は、御らんして、いとらうたく、あひきやうある、御かほはせにて、やゝ久しく見え給はさりしは、いかなる事そや、このたいへうつりて、世の中のことしげき事を、みゝにふれず、なをさりの人々をあつめて、いと忍ひやかに、目をくらし侍れば、こよなう、こゝちはれらかにと、のたまふも、いとあひきやうあまれり

主殿も、此ほとは、ふるさとのゆかりのものとも、えやみによりて、はる／＼とまいりさふらへは、いと(1オ)かるき風にて、はやくやみぬ、まつよろこはしくて、のほり侍りしかは、君の、この御しよへ、うつらせ給ふことをのみ、きゝまいらせて、御ゆかしさのあまりに、まいり侍るなりとて、うちあけて、御かほを見れとも／＼、めかれせず、かくまで、いつくしくおはしける事の、ありかたさよ、いかなる、ほとけほさつのへんけにて、おはしけるそやと、御そうかうの、くほむはかりにそ、なかも侍りける

そのゝち、ひめ君は、いかにや(1ウ)、とのも、ふるさとのかたは、山ちかく、野里のもとなれば、さそ、物わひしくすまひて、けうあらんかし、うらやましきところのみ、見はんへりて、あるものかな、みやこにたかひたる事とものあらは、かたり給へと、申させ

たまへは

主殿、うけ給はりて、されは、ふるざとは、野分の風もすさまじく、はにふのこやのわひしきに、鳥のこゑ／＼かまひすく、苗代水の水口に、よとみかへるもすさまじく、あらをたかへすしつのおか(2才)、むくつげきありさまは、深山にすめる苔猿にことならずまた、しつめの、はかなき竹にてあめる、ふこといふもの、ひちにかけて、またいはけなきみとり子を、二人三人、あとに引つれて、沢辺におりては、芹をつみ、くろにゆきては、わかなの、いとくゝたちたるを、つみそろへ、よもきの、またわかやかなるを、わらはにとらせなとして、ひめもす、ななき日をくらしあへるも、いとあはれにみえ侍る

かゝる中にも、ふせいやさし(2ウ)く見えけるは、ひろき野の草のあをやかなるに、野鯛のうしこのゝかしこに、ひとつふたつ、いたいけしたるか、おやの尾につきて、ゑはみするも、いと物あはれにて、らうたく見え侍りぬ(3才)

〔挿絵・第一図〕(3ウ)

山もとちかきはやしの中に、ほこらをたてゝしか、暮つかたには、とうみやうのかけ、ほのかに見えわたりぬるも、いとありかたし、また、うき世をそむきて、山林に入て、しはしのやとりに、草のいほりをむすひて、あらしをふせくよすかとし、朝晩に、こんきやうのこゑ、けいのひゝき、かねのをと、かすかに聞えわたるも、ことにすくれて、たうとくおほえ侍る

いかなるたけきものゝふの、いきほひあまりて、いさましからん人も、かやう(4才)のところに、しはらくもすまゐて、こゝろをためなは、むしやうは、いかてかおこらざらん、いさゝかのあいた有

し我たに、あさ夕君につかへて、心をくるしめ、なみのたちゐに、人のあひきやうをのみもてはこひ、いみじき人の心にしたかひて、むさぶりかほにたまはるも、いとよしなくおもひ奉るそやと、かたり侍りければ

姫君、きこしめし、あはれにきゝ給ひて、いかにもして、かゝるところを見はやとそ、おほしける、もとより、しつか(4ウ)わざ、世わたるいとなみは、いとほかなき物とは、きゝたるそや、きくたにも、はかなく、つたなきわざにおもへるに、みたらましかは、さそあるらん、うらやましくも、聞ゆる物かなとそ、うちわらはせ給ふ

そのとき、とのものは、ふところよりふみとり出で、これ御らんさぶらひてたひ候へ、やんことなきかたより、たのみはんへるか、おほろけの人の、よみさふらふへき物にもあらすと、申侍れば、いてや、君にみせたてまつりてこそとて、是(5才)まで、もちてまいれりとて、さしいたし侍りければ

ひめきみ、なにこゝろもなく、とらせ給ひて、おしひらき見給へは、色ふかく、人をねたくも、こひの瀬の、たちゐに物を、おもへるなど、こま／＼とかきて

乙女子を、ふかくそ我は、こひころも、なみたの淵に、袖はくちぬる

と、かきたるを、とく／＼と、うちうなつかせたまひてければとのも、申されけるは、此うたのこゝろは、いかなる御事やらん、きかまは(5ウ)しくこそと、申ければ

ひめ君、きこしめし、おとめ子といへるは、十歳のうちそとのむすめの、いまた、つまにあはざるをいへるとなり、それをこひて、あ

けくれ、涙なみだにしつみしか、袖のふちとなりて、くちうせなんと、聞えしなりと、おほせければ

とのものは、是をうちきよて、是は、いかなる人の、かゝせ給ふとか、おほしめず、当時、君につかへさせたまへる人々のうちに、うへこそすきやうはおほせさりける、右大臣兼貞公の御猶子に、お(6才)ちくほのちうしやうとのゝ、御手にて侍るそや、かたゝより、しかるへきひめ君たちを、申させ給へとも、好色かうじやくの君にて、なみゝなる人を、うけ引し給ふこともなし、されは、事のたよりに、君の御うへをきこしめして、わらはに、此ふみまいらせてたひ候へと、あなかちにおほせられ侍るほに、いなみかたくて、これまで、もちてまいりたてまつるそや、しかるへくは、こゝろやすめの御かへりこと、給はり候へと、いとひやかに、さゝやきければ(6ウ)

ひめ君は、御かほ、うちあかめさせ給ひて、あらよしなや、山みちにふみたかへて侍る物かな、父のきかせ給ひなは、よのつねならぬ、御とかめあるへきそやと、のたまひて、うちそはみてそ、おほしける

姫君の御めのとほ、見たてまつりて、うつくしきひけこに、さまゝのくた物など、つみいれて、もちてまいりてければ、ひめきみ、見たまひて、とのものに、此ひけこをとらせ給ふ

とのものは、かゝるひかゝしき物を、給はりて侍れば、か(7才)へりて、たれにか、とさんにまいらせさふらふへき、おもひ出たる御事こそさふらへ、たてまつる人こそ、おもひまうけ候へと、いひければ

一間なるしやうしのうちより、めのとを、やゝと、よひければ、あ

やしやとよ、たれなれば、いらなくよひたつるそやとて、たちいりてみれば

弘徽殿ひろみくどのの御ご座ざより、ようの事ありとて、とのものを御たつねありければ、かへるさをまちわひさせ給ふそや、はやく、事つとめなは、出やり給へかしと、きこえ(7ウ)ければ

このとのものは、大やうなる人にて、いかさまの事あればにや、かくあはたゝしくは聞ゆるそやとて、めのとにあひて、此事、かさねてまいり侍るへし、よきやうに、ひめきみへは、ほのめきをき給へと、せつなくかたりて、ひめきみへちかへりて、かうゝなん、申きたり侍れば、かへりまいりさふらふ、やかてこそ、まいり侍らめと、申ければ

ひめきみ、たまにまいれるものか、なにとて、事いらなくかへり給へるそや(8才)、こよひは、あそひて、かへり侍れかしと、とめ給へとも、いとま申て、出やりにける(8ウ)

〔挿絵・第二図〕(9才)

去ほとに、ちうしやう殿は、めのとか婦りの、きかまほしくて、その日のたそかれときまで、待給ふに、軒端のきばに風のをとつれて、つまとのなりわたるも、それかとおほして、むねつふして、まち給へとも、見えす、いとわひさせ給ひて、けうそくにより、御手をうちかけて、つやゝ物をあんしかほにて、おはしけるところへ、父大臣の御かたより、藤わか丸といへるわらは、御せうそこ、もちてきたりぬ

中将、ひらきて、御らんしければ(9ウ)、おほせあはせらるへき事あり、はやゝいらせ給へと、あるほとに、中将殿は、ちからなく、出給ふへきとて、御さうそく、引つろはせたまひて、六あ

しんと御ともにて、わらはにはかり、ともさせて、おはしける
扱、いらせ給ひて、見たまへは、母屋の簾、はるかにとりつくりひ
て、らうそくなど、ところ／＼にとほさせたるていは、はなやかに、みやひやかかなり、うちよりいらせ給ひてければ

父大臣とのほ、こよひ、春宮、左府などの、御まうけをしはん(10
オ)へれば、さてこそ、御身をもむかへまいらすれ、よろつ見まは
し給へと、の給ひければ

ふしきのまうけを、し給ふ物かなとて、かなたこなたと、とりつ
ろひて、かうろに、たきものなど、いみしくかほりて、まち給ふに
春宮の御くるまのをと、つるひちのほか聞えければ、大臣との
も、ちうしやうも、廊の外まで、むかひ出給ひてければ、御くるま
より、おりさせ給ふ(10ウ)

〔挿絵・第三図〕(11オ)

左府、かいしやくしたまひて、殿につかせたまへは、ちうしやう、
らうそく、いみしくかきたて、こよひの行啓こそありかたけれ
と、の給ひければ

あまり、このほど、うちつゝきて、こゝちれいならされは、うち出
て、まぎらばさんと、おもひたちて、忍ひてきたれるにこそと、仰
ければ、けにこそとて、さま／＼にもてなし、かしつき給ふ

春宮の御まへに、たてさせ給ふ、御ひやうふに、かことしたる、い
は山をかきて、まへに、谷水をかゝへて、そのかたはら(11ウ)
に、あやしけなるいほりをむすひたるか、いほりのまへに、青柳
の、いとしなひやかなるを、五本うへて、そのかたはらに、かめを
ふたつならへて、書をさしそへて、いほりの中に、あやになる老
翁の、忽然としたるふせいを、さもあるやうにかきたり

春宮、御らんして、これは、いかなる物をかきけるやらんと、御た
つねありければ

ちうしやう、の給ひけるは、それは、陶讀と申仙人にておはしまし
侍る、このとうさんは、書をこのみ、酒を(12オ)あひし候、まへ
なるかめは、さかつほにて候、つねに柳をすき侍りて、おのの前
に、五もとつゝ、柳をうへて、そのかけに、けうかいをかくし侍り
ければ、世の人、五本先生と、かうし侍るなりとぞ、申させ給ふ
又、そのならひに、うつは物に壁玉をもちて、帝へさゝくるところ
を、さもらしくかけり、是はいかにやと、申させ給へは

むかし、或人、玉をみかとへたてまつる、君は、なゝめにおほしめ
して、すなはち、玉磨をめして、みかきて(12ウ)まいらせよと、
ちよくちやうある、たますりは、うけ給はりて、みかきたてまつり
候とも、ひかり、いつましきよしを申、帝、いからせ給ひて、玉す
りをとらへて、右の手をきりたまふ

そのうち、次のみかとへゆつらせ給ふに、また、このみかとも、玉
すりをめして、みかきてまいらせよと、仰られければ、是も、光は
出ましきよしを申、みかと、いからせ給ひて、父皇の例なればと
て、かたもゝをきりて、はなし給ふ、玉すり、かなしみて、なく涙
つきて、のち(13オ)には、くれなゐのなみたをなかせりと申

又、そのうちのみかとへゆつり給へは、すなはち、玉すりをめして、
みかきてたてまつれと、おほせらるれば、かしこまりて、みかきけ
るに、いかにもめてたき光いつる也、和氏璧玉といふは是なり、そ
のひかり、さすことは、車十二両をてらすといへり、荆山といふ山
より、荒玉をもとめて、たてまつれるゆへ也とぞ、申させ給ふ
君、きこしめし、あないみしの事や、いにしへの人は、よろつ、我

心にま(13ウ)かせて、ふるまひしことの、おこけなさよとぞ、仰られける

かくて、女はう、采女は、御かはらけもとりければ、はやうちふけぬとて、たゞせ給へは、うしかひ、御くるま、さしよせければ、みやは、みすかきあげさせ給ひて、めされければ、いかにもしとやかに、御くるまをつかまつりて、かへり給ひぬ(14オ)

〔挿絵・第四図〕(14ウ)

〔挿絵・第五図〕(15オ)

大しんとのも、ともにかへらせたまふ、ちうしやうとののは、夜もふけぬとて、こよひは、このてんにおはして、夜もあけぬれば、かへらせたまふか、ちやうのうちへいりたまひて、ふさせたまふ

さるほとに、ひめきみの御めのとは、けちかくまいりて、ひそめて申けるは、とのもか、もてまいりしふみは、よくく見たまひけるにや、このおちくほのちうしやうとののは、右大しんとの(15ウ)御子といひ、さいかく、ゆうちやうのきみにて、うちにも、ゐんにも、他にことなりし御おほえにて、はんへるそや、かそいろの人々も、いかならん人をも見せはやとて、かなたこなたのひめきみたちを、申させたまへとも、かうしよくの人に、さらに、うけひきおはしませす

されは、とのもかさいかくにて、ひめきみを、この人にあはせてまつらは、いか(16オ)はかり、御父ちうなこんとのも、よろこびたまひなん、大しんとのも、さもあらは、御こゝろつかひもやみぬへしと、おもひよりて、かくいひはんへるそや、いつまで、かくひとりなかめかちにて、とし月をおくらせ給ひ(16ウ)、親達に、とやかくやと、物おもはせ給ふへきそやと、かきくとき申けれとも

あふさきさのいらへもなく、たゞ、うちそはみてそ、おはしけるその後、ちうしやうとのへ、主殿は、まいりて、申けるは、さいつころ、ひめ君へまいり侍りて、心しつかに、よろつ、御物かたりとも申たてまつりて、うちとけあそはせ給ふに、御けしきよろこはしき折からなれば、かのものをとり出て、まいらせしに、つくくくと御らんして、御歌のやうを、御(17オ)物かたりましけるそ、よそくなり

そのとき、うわさを申いて侍り候へは、かそいろの、もれきゝ給ひては、すゑおそろしと、のたまひしほとに、とかくと、すかしたてまつるところに、うちより、よひたてはんへるほとに、ちからなく、かへり候へは、相国の、麗景殿へ御いりあるほとに、主殿司つかうまつれとて、よひたて給ひしなり

それより、いかゞしてか、なひかせたてまつらんとて、おもひわつらひ侍りしなり、きのふも、わらはをし(17ウ)て、ひめ君のめのとかもとへ、せうそこをもて、とひ侍れば、くれつかたにこよと、かき侍るそやと、申ければ
中将、さこそはあるへけれ、うちすて給はて、返しとりて、えさせたまへとぞ、おほせられける(18オ)

〔挿絵・第六図〕(18ウ)

扱、そのうちに、の給ひけるは、いかにや、とのも、いかならんたよりも、もとめて、この人を、我に、ひとめみせてくれよかしと、あなかに、申させ給へは
とのも、さほとおほしめしきふらは、此くれに、みつからまいり候へし、君も、いと忍ひやかに、たゞひとり、物にやつれて、おはしまし候へと、聞えければ、心え給ひて、暮にはかならずとて、

めのとほ、かへりはんへりける

そのうち、中將とのほは、あやしけなるおのこに、つくらせ給ひて、つほ(19才)かき、ふかくめして、わらくつをはかせたまひ、御とものわらはに、いかにやと、の給へは

うちゑみて、なにとやらん、にけなき御ありさまにてこそ、おはしまし候へと、申ける

ちうしやうは、ふせいつたなく、あらまほしきこそ、ほいなれと、かへりて、うちよろこはせ給ひて、御こゑなども、ひなひたるこはいろにして、そのさま、いかめしくおはしけるを、みるも、いとそかくし

かくて、その日の暮かゝるを、おそしと、まちつくし給ふに、ほともなく、日(19ウ)も西ようにかたふかせ給へは、とのもか、いりくるを、おそしと、まちわひ給ふに、たそかれときに、たゝひとり、ふるきねりきぬの、あはらなるを、引かつきて、きたりぬ

中將とのほは、しはしあはせ給はて、後、出させ給ひて、かうくしにてなん、しのはゝやと、おほせけれは

とのも、うちわらひて、さてもく、すけなく、おこのけなる御かたちやとそ、うちゑみにける、さもあらは、みつから、さきへ参るへしとて、うち出て

ひそかにめのとにあひて(20才)、ちうしやう、かうくしなん、の給ふほとに、ほとなく、きたらせ給ふへし、こよひは月もおほるにて、人のかけもさたかならず、まかきのもととなる、うら戸をあけて、よそながら、見せさせ給へとそ、申ける

めのと、ちううなつきて、手つから、まかきのもととなる、うらとをあけて、扱、ひめきみに聞ゆるやうは、こよひは、月もおほるに

て、空もかすみわたりさふらへは、おはしまちかく出給ひても、なにかしたまふへきとて、らうそく、いとひかくし(20ウ)くたてゝ、ひわ、ことなど、とりちらして、人々、とりかこみ、まどゑしてそ、見えたり

さるほとに、ちうしやうとのほは、ひるつかたより、人やりならずおほして、かゝるありさまに、出たちぬるも、さすかにおもはゆし、すきしころより、主殿に、けさうせられて、恋のやつことなりぬる事、おかしさよと、ひとりこち給ひて、出給ふほとに、かの御所にそわたらせ給ふ

しつらひを見たまへは、あれたるやとを、すこしつくのひて、人め(21才)しのぶの、軒のきに生おいて、つたかつらの、あをやかに、かへをとちて、夕の風に、うら吹かへし、さはきあへるも、いとあはれなり、かけかねをはつしをきし戸を、いと忍ひやかに、あけさせ給ひて、そのまかきをうちこえ、はしちかく、たちしのひ給ふに、心ほそき、いかばかりなり

あやしけなる、いたしきのうへに、たちやすらひ給ひて、ことをきゝたまへは、けはひのわかやかなるか、つれくにおはしまし侍るに、ひわをあそはし給へとそ、申け(21ウ)る、やゝありて、ひめ君は、引よせ給ひて、てんしゆに手をうちかけ、ねちなをして、しらへ給ふに、主殿は、きたりぬ

めのとほ、是をみて、いかにや、ふしきにも、きたり給ふ物かなと、いへは

此あいたは、こゝ地あしくて、御さとのたいに、うちこもりさふらひしか、いさゝか、けふは、こゝちもてなをし侍るほとに、御ゆかしさにこそ、まいり侍りつれと、申されけれは

ひめきみ、こゝろにかけすは、いかてか、きたり給ふへきそやと
そ、おほせられける (22オ)

ちうしやう殿、忍ひり給ふよしを、主殿は、めのとに、さゝやき
ければ、めのとは、袖を引て、めくおせしければ、こゝろえぬ
さて、中将との、ひめ君を、板戸のすぎより、つく／＼と見給ふ
に、御としのころは、十五六に見えけるか、まことに、そうかうい
みしく、あてやかにして、らうたき事かきりなし、さくらかさねの
五つきぬに、うす紅梅のはかま、たかくめして、ひわをひさにをき
たまひて、はれらかにして、おほしける、まゆにこほれ (22ウ) か
ゝるかみを、ふりあをき給へる御ふせいは、女郎花の、露おもけに
て、秋風にたをめるよりも、まさりて、やさしくそ見たまひける
日ころ、主殿かいひしをも、いかはかりの人をかいふらんと、おも
ひしに、まことに、心にくゝもおはしける物かなと、みれともく
めかれし給はず、はやくして、ひわをひき給へかすと、御あしもた
ちこほりて、まほりの給ふに

主殿とめのは、中将、忍ひ給ふことを、うしろめたしとおもひ、
えんに出 (23オ) て見はやと、おもへとも、もし、つきて人も出な
は、いかゝすへきと、おもひて、たちもやらさりけるか (23ウ)

〔挿絵・第七回〕 (24オ)

かゝるうちに、雨のそほふり出ければ、ちうしやう、あらにくのこ
よひの雨や、かくしては、いかゝたまるへき、もし、門もりにあや
しめられては、せんなかるへしと、おほしめして、ゆくりなくも、
しのひ出させ給ふ

いよ／＼、雨も、はしたなく、ふりまさりければ、ちからをよはせ
給はて、誰人随外久征戎、何処庭前新別離するといへる、ふるき

心をおほしめし出て、笠うちかたふけて、このしつらひを、出させ
給ふもあはれなり

いよ／＼ (24ウ) しきりに、ふりまさりければ、ある家の軒に、た
ゝすみ給ふに、軒の雫、いとおもしろくうつほとに、遠し簷点滴琴筑
のことしといへる詩も、かはかりのことをやいひつらんと、おほし
出て、晴間をまわひ給ふほとに、三更のころほひに、雨雲もひき
さりて、空もはれらかなりぬ

ちうしやう、よろこひ給ひて、いそぎ、はしり出させ給ふに、やう
／＼かへり給ひてければ

御めのは、はしり出て、こはいかなる御ほかうそや、浅まし (25
オ) 御ありさまかなと、あきれたるこゝ地にて、御ゆなとまいらせ
て、御身もすまし給へは、丁のうちへ、いり給ひてけり (25ウ)

おちくほ 春之下 (題箋)

さるほとに、主殿は、その夜うちふけて、ひめ君も、丁のうちへい
らせ給へは、みな／＼よりふしぬ

めのは、主殿にさゝやきけるは、こよひ、ちうしやうとの、さた
めて、忍ひきたり給ひなやと、いへは

との、されはこそ、きたらせ給はんか、おもひのつきぬ物から、
しとけなき雨に、あはせ給ひしことの、うたてさよ、さて、いかゝ
すへきそやと、いへは

めのと、申けるは、中将殿、うちなけきおほしめし給は、御身と
わかからひにて、あはせた (1オ) てまつらんに、なにか、くる
しき事の侍るへきそやと、いへは

さらは、こよひの御ふみに、かへり事をせさせ給へかし、みつから、かへさにまいりて、聞ゆへきにやと、いへは

めのと、うちうなつきて、夜もあけわたれば、ひめ君に申けるは、ゆふへは、夜うちふけて、いかに、なかあそひにこそ、おはしまし候へ、されは、とのもゝかへりなんと、聞え侍る、また、かの人の御かたより、御文まいり侍るそや、心つよきやうにおはしまさんも、いと色なし(1ウ)、見給ひて、御へんししたまふへしと、申ければ

ひめ君、きこしめし、されはこそ、我も、としたけて、かくあるへき身にもあらず、つゐには、いかならん人にも、見え侍るへかめれと、かそいろの御こゝろ、かねて、とかく、返しすへき心地もなしと、いろふかけに聞え給へは

めのと、申けるは、御返したにもし給は、みつから、御父母へ聞えたてまつるへきそや、此ちうしやうとのへまいり給ふと、きこしめし侍らは、いみしく、よろこひわたり給ふへきそや(2オ)、此主殿のかみは、麗景殿、温明殿の女御の、よになきものゝやうに、おほしめす、つほねそかし、此人の、かく、わりなく申させ給ふうへは、いかてか、さかなき事をはきこゆへき、御かへしたにし給は、中將、あさからすかしつき給ふへし、さもあらは、父ちうなこんどの、いかによろこひ給はざらんと、申ければ
ひめ君、御ふみとりあけて、御らんし、いまはたえかねてなと、かゝせ給ひて

我恋は、千尋のはまの、あまをふね(2ウ)、かひもなくして、すみやはつへき
と、かき給ふを見給ひて、紅梅のたんし、一かさねに、かくそ

障奥の、ちいろの浜に、ひくあみの、かゝりてもまた、かひやなからん
と、あそはして、引むすひて、いたしたまへは

主殿は、たもとにおし入て、やかて参候はん、ちうしやうとのに、聞えさふらふへき、ゆふへよりは、さためて、うしろめたく思ひ給ふらめ、つねにも、いらなく、みつからに聞え給へとも(3オ)、いさゝかのいとまなき身なれば、とふにかひなく、うちすきぬ、此人は、いつとでも、こゝろしるからぬきみにて、はつかしきそや、はやくかへりなん、とかく時をうつして、ひるまになりぬるそやとて、うち出ぬ(3ウ)

〔挿絵・第一図〕(4オ)

それより、中將とのへまいり、見たてまつれば、おりふし、おはしまのかたに、うちかゝりて、庭の草なとらせて、おはしけるか、とのも、まいりたると、いへは、うちへいらせたまひて、いつちにやと、おほせければ

主殿、しやうしのかけより出て、いかにや、君は、ゆふへは、いかゝおはせしけるそやと、申ければ
ちうしやう、うちわらはせ給ひて、扱も、あやにくき事にこそ、もしも、せきもりにあやしめられ侍らは、なたゝる事の、口おしくやありなん(4ウ)、雨は、いたくふりきぬ、あやしけなる、

しつか身のありさまに、きぬうちかへぬれば、雨のしつくの、はたへをとをして、あさましくも、かなしくも、いはんかたなきそや、されはとて、この人をつくくみて、しこりすまにあるへきにもあらず、いよゝすゝろに、いとをしきそやと、こちたはふれたまへは

主殿は、うけ給はりて、あら、うたてしきめに、あはせ給ひける物かな、さこそはおはしますらめと、めのとゞおもひやりてこそ、有つれ(5才)とも、せんかたもなく侍るところに、さようちふけて、門守か、かけかねのはつれぬるを、あやしめ侍りしほとに、めのとか、たばかりて、いぬとの、外に、いたくなきしほとに、なになるらんと、あやしく思ひて、みつから、戸あけて見侍りしそやと、いひければ、さてはとて、やみぬ

さて、ひめ君の御返事をまいらせければ、ちうしやう、よにうけられたけにて、おしひらき、御らんすれば、かくそ、たゞ、たのみもかひもなからましかはとの、こゝろねも(5ウ)ことはりかな、かきたまへる手のほと、いみしさよ、かたちによする芸才にて、たらいたる人にこそとあれと、うちよるこひ給ふ

さて、主殿は、ちかきほとに、あはせ奉るへしとて、かへりける、中将は、はやくして、この人にあひなんことのみ、おもひふくれ給へり、また、ひめ君も、この事のみ、御心にかゝりて、いくはくの事をそ、おもひつゝけ給ふ、たかひの御こゝろくらへも、あはれにそ聞えける(6才)

〔挿絵・第二図〕(6ウ)

さるほとに、女御は、主殿をめして、いかにや、中しやうは、いかなれば、あけくれ、ひとりすみにて、世をなめかちにては、くらさせけるとぞ、とうくうのおほせ事そや、されは、秋山の太納言の、むすめ、ふたりもち給へると、小武かいひしほとに、いそぎ、たつねてまいれと、仰ければ

うけ給はり侍るとて、いてけるか、あら、むつかしき事を仰らるゝ物かな、中納言殿は、このひめ君を、ふかくおほしいれたまへは、

今は、いかなる人にも、おもひかへさせ給ふ(7才)事はあるまし、されとも、おほせを、いかてか、かすめたてまつるへきとて大武のつほねかもとへゆきて、かう／＼なん、おほせられさふらふか、いかにおはしけるやらんと、いへは

されはこそ、光はかりに見えさせ給ふ、ひめ君はらから、ましますなれば、いつれにても、中しやうとのへまいらせ給ひて、しかるへしと、申まいらせしそやと、いへは

主殿、此中将殿は、いろこのみふかきゆへに、今まで、かなたこなたより、ひめきみたちを申させ給へとも(7ウ)、いさゝか、きゝいれさせ給はず、御こゝろに、いかゝおほしけるも、はかりかたければ、まいりて、めのとに聞えはやと、いひて、かへりける

そのうち、主殿のかみは、ちうしやう殿へまいりて、めのとにあひて、女御のかくまではからひ給ふか、いかゝ侍らんと、いへは
めのと、うちきゝて、よしや、いかにおほせらるゝとも、この人もちひ給はし、すきし比、ときめきたまふ、有明のひめきみ、いとなまめける君なる事を、きゝ給ひて、とかくして、みせ奉れとも(8才)、いかゝ見給ひけん、二たひとも、仰もいたし給はぬそや、いかなると、ゝひ侍りければ、かたちおさ／＼しからず、物のけちめみえて、よしなしと、の給へり

いかなる、さきの世のちぎり、おはしけるにや、きゝ給ふより、こかれ給ひて、かいまみ給ふより、たえかたけにおはしけるなれば、たゞ、かなたこなたへ、こゝろをうつさせまいらせて、まよはせたまつらんも、いかゝはしからん、たゞ、しのひやかに、はやくして、この人にあはせ侍るへきそやと、いへ(8ウ)は
主殿、うなづきて、さらは、こよひ、あはせ侍るへし、たそかれと

きにはあひなんと、ちきりて、かへりける
扱、中将とのへまいりて、こよひ、かならず、あはせ侍るへしと、
めのとにちきりて、かへりさふらふそや、夕つかたには、まいり候
ひなんとて、御所へそ、かへりまいりける

さて、女御へまいりて、大式に、いさゝかの事を、あらまし、たつ
ねて候へは、はらから、おはしまし侍を、いつれをなりともと、申
侍ふほとに、ちうしやう殿に、聞えさふらへは(9オ)、しかく、
いらへもし給はず、こよなき御けしきなれば、みつからも、おもな
しにて、たち侍りぬと、申ければ

女御も、うたてしき人にこそと、の給ひにける(9ウ)

〔挿絵・第三図〕(10オ)

さるほとに、めのとは、ひめきみに、こよひ、ちうしやうとの、い
らせ給ふへきなれば、丁のうちそと、しつらひ侍らんとて、さしき
のちり、うちはらひ、あやの御几帳きまじやうかけなをしなとして、ひめ君に
も、御しやうそく、きせまいらせける、紅梅のうちきに、柳の七つ
きぬ、くれなゐのはかま、ふみくゝみ、ひあふきとりそへて、あく
まで、いつくしき御くしを、ゆりさけて、ゐ給へる、よそほひは、
たくひはあらしとそ、みえにける

扱、ちうしやう殿は、はたには(10ウ)、しろき御小袖をきたまひ
て、くろきうきもむの御しやうそく、藤ふじいろの下はかまにて、まゆ
ふとうはかせ給ひ、御かうふりのうへに、しろきあやのうすきぬ
を、かつかせ給ひて、上臈女かみむすめはうの、さとかへりにことよせて、わ
らはひとり、つれさせ給ひて、やうく日もくれかゝり給へは、し
のひやかにそ、御所をいてさせ給ひにける

主殿は、さきへゆきて、中将殿をまちわひけるか、ほとなく、いら

せたまひて、すいかきのもとに、たゝすませ給へは、主殿は(11
オ)、あやしや、女はうのたちやすらへると、むねうちさはきけれ
は、中将、見給ひて、まねかせ給へは、さては、此君にこそと、お
もひて、さしよりて、御手をとりて、忍ひ入まいらせける

かくて、御母屋のみすのうちへ、ちうしやうとののは、いらせ給ふ
か、姫君は、御さうそく、けたかくし給ひて、らうそく、たかくた
てゝ、うちそはみてそ、おはしける、中将殿も、御さちかくなをら
せ給ふ

めのとは、たき物かほりて、ちうしやうとのへまいらせければ、そ
のゝち、また(11ウ)、姫君へそまいらせ給ふ

さて、御かはらけまいりければ、ちうしやうとの、はしめさせ給ひ
て、ひめきみへまいらせ給ふ、そのゝち、主殿、給はりて、あなた
こなたとまはりければ、おさまりて、のち、夜もはやふけゆきな
ん、とのものは、こよひは、此御所にやとして、朝またきに、かへり
なんとて、めのとかねやにそ、こもりける(12オ)

〔挿絵・第四図〕(12ウ)

そのゝち、中将とののは、丁のうちへいらせ給へは、ひめ君は、うち
つけなれば、おもはゆけなるけしきにて、うちそはみ給ふも、あは
れなり、御間屋かまやのあたりに、まとゐする人も、あらされは、らうそ
くも、とをく、ほのかにたてて、しつまりかへりたり

今は、夜も、いたくふけゆくそや、そひふしなんとて、ひとつ御さ
にうつり給ひて、さまく、かたらひよらせ給ふほとに、ひめ君
も、今は、御こゝろとけて、とかくと聞えしより、心にかゝりて、
いさ(13オ)さかもたえまなく、人やりならぬこゝ地こそ、し侍り
しなりと、たかひに、むつことつきざりけるに

八こゑの鳥もなきわたりければ、あさいなは、人めのせきの、つゝましきに、いてやらんと、おほして、窓の戸をさしあけて、そらを見給へは、はや、山かつらさしわたしてければ、ちからなく、きぬく／＼にそなり給ふ

ひめ君、わかれ、かなしくおほしめして、またの夜を、ふかくちぎらせ給ふ、中将、ねやを出させ給ふとて (13ウ)

あくるそと、聞もうらめし、鳥の音に、また立そふる、東雲しのぶのそら

と、聞えければ、姫君

あけわたる、空に関もり、あるならば、しはしといひて、たのみやはせん

かやうに、うちたはふれ給ひて、たちわかれさせ給ふ、それよりは、たかひのおもひ、ふかく、此世ならず、後の世までもかはらしとぞ、ちぎらせ給ふ (14オ)

〔挿絵・第五図〕(14ウ)

そのうち、とのもの、ちうしやうとのにあひて、いかにおほしめすそや、しかるへからん人のあらは、また、御心をうつしかへはやと、おほしめすかやと、申ければ

うち多み給ひて、とし月、おもひよる人のあらざりしは、此人に、ふかきちぎり有てこそはあるらめ、かはかりおもふ人は、世にふたりともあるへしともおもほえずと、の給へは

主殿のつほね、あら／＼、ひかひかしのおほせ事や、まことに、ふかき御ちぎりあるにこそ、かく、おほしめしたため (15オ) 給ひなは、父大臣へしらせ給ひて、御所へうつしまいらせ給ふへしとぞ、おほしめされさふらへと、いひければ、うちうなつかせたまひ

ぬ

さるほとに、春宮は、麗景殿へおほして、いかにや、秋山のひめとも、はらからあるなるに、なとて、ちうしやうには、あはせ給はぬそやと、のたまひければ

女御は、きこしめし、とのものつほねにとはせさふらへは、中将、そらさまにきくなしけるにや、その後、なにとも、ほのめくことも侍らず、いか／＼有やら (15ウ) むと、申させ給へは

宮は、きこしめし、父大臣へ申させ給ひて、はやくみせさせ給へ、さもあらは、ちかきほとに、節会のおはしますか、此ちうしやうをも、中納言に任せらるへきとなれば、かく、いつまでひとりすみにて、いたつらにあるへきそや、父のおと／＼にまさりて、才の、ゆふに、いみしくむまれたるとて、御おほえも、大かたならざるそやと、仰ければ、

女御も、まことにいみしく、ありかたき事にそ、おほしけるそのうち、主殿のつほねを (16オ) めして、おほせけるは、いつそや、いひしことは、いか／＼しけるそや、宮も、かう／＼なん、おほせらるゝに、とくして、ちうしやうに、あはせよと、おほせられければ

局、うけ給はりて、よく／＼申聞えさふらへとも、とかくのいなせも、し給はねは、ちからなく、心ならず、日ものひはんへりぬ、いそぎ、中将とのをめして、聞えさせ給へかしとて、たちにける

さらはとて、おと／＼へ、此事を申させ給へは、それこそしかるへき事なれ、ことに、春宮の、かく (16ウ)、はからせ給ふも、ありかたし、いかてか、いなみたてまつるへきとて、いそぎて、ちうしやうとのをそ、めし給ふ (17オ)

〔挿絵・第六図〕(17ウ)

おちくほは、きこしめして、いかゝおほしけん、こゝ地あしきとて、まいり給はす

かそいろは、きこしめして、御つほねの玉井のまへを、御つかひにて、こゝちのやうを、みてかへれと、おほせらるゝほどに、まいりぬ

中将は、つねのところにおはして、さうしなど、とりちらして、ましくけるほどに、玉井の前は、かうくなん、おほせられ侍るそや、御いれいのやうには、見えたてまつらす、いかゝある御事にかと、申侍りければ

ちうしやう、い(18オ)さゝか、風のこゝ地ありしか、ほとなく、さめぬれば、いまはやすし、やかて、まいりなんと、申させ給へは、玉井は、かへりぬ

そのうち、中将とは、御かうふり、さうそくましくて、六ゐをつれさせ給ひて、父の御所へそ、おはしける

父母は、見給ひて、いかにや、こゝちれいならさると、きゝしか、いかゝ侍るやらんと、申させ給へは

ちうしやう殿は、いさゝか、風のこゝちけにさふらひしか、ほとなくさめ侍ると、申させたまへは

母まんところ、申させ給ひけるは(18ウ)、春宮よりのおほせとて、女御より、かく、はからはせ給ふなれば、此長月には、むかへ侍るへし、そのほどに、御所をあらためさせ候はんするそやと、のたまへは

中将殿は、とかくのいらへもおはせず、なにのけうもなけにて、おはしければ

おとゝは、御らんして、いかにや、中将は、おやのいふことを、いとおかしけにおもひなすかや、いかにと、御けしきかはりて、見させ給へは

いかてか、おほせをいなみたてまつるへき、ともかくも、御はからひのうへは、なに申侍るへ(19オ)きそやと、申させ給へは

政所は、きこしめして、大臣との、いらなく仰らるゝ物かな、はやくかへり給ひて、こゝちわつらはしくおほせぬやうに、いつちへも出て、うちはれ給へと、の給へは、かしこまり候とて、出たまふ(19ウ)

〔挿絵・第七図〕(20オ)

そのうち、我御かたに、かへり給ひて、めのをめして、あな、おもふやうにもなき、うき世のありさまかな、けふは、心にあはぬ事のみ、きゝ侍れば、あはれ、えいせんのたきあらは、みゝをあらひて、すつへき物をやと、の給へは

めのと、なに事をかきゝ給ひて、かくは、の給ふやらんと、聞えければ

かうくなん、仰さふらふほどに、心にあはぬうらめしさ、むねふたかりて、なさけなきそやと、うちなみたくみたまへは

めのと、うけ給はりて、それを、かはかり(20ウ)、むつからせ給ふは、おほけなき御こゝろかな、人人のうへに、かゝる事こそ、おほくさふらへ、よし、なけき給はすともありなん、主殿、まいりさふらはゝ、いかやうにも、はからひさふらはんそやと、いさめければ

ちうしやう、きこしめして、たとひ、父母の、なかきふけうは、うけぬるともこの人を、見はなち侍るへきとは、おもはぬそや、けに

も、あなかに、せいし給は、ちからなく、ふかき山にもいるへしとそ、おほせける(21才)

おちくほ 秋上(題箋)

さなきたに、秋のゆふへは物かなしく、にしふく風も身にしみて、まぐらの下のきりくす、こゑもやうくかれく、あはれをそふるおりなれば、なつそふ人の御ことを、よすからおほしつゝけちうしやうも、この人に、その心さし、おいらかなれば、あさからぬ契りにて、いかてか、うちやり給ふへき、あまり、こゝちむつかしとて、さとの御所へおり給ひて、ふるき物かたりなとを、とり出させ給ひて、詩をすんし、歌(1才)をよみ、あはれ、はかなき世の中にと、かきたる、ふるきこと葉、ひとりこちて、ひちつえつかせ給ひて、おはしけるところに

いとしのひやかに、あんないをそ、こたふる、わらは、いて、たと、いへは、此文、中將殿へまいらせ給へと、いふほとに、いっちよりそと、いへとも(1才)、いらへす、た、参らせよと、申けるほとに、とりて、中將殿にたてまつりければ、玉水よりの御せうそこなり(2才)

〔挿絵・第一図〕(2才)

〔挿絵・第二図〕(3才)

うちよろこひ給ひて、ひらきて、御らんすれば、秋の山より、このみをまふけさせ給ひて、めつらかに、かしつかせ給ふよしを、ことのためにより、ほのきゝ侍ることの、うらやましさに、これにつけて

も、わか身は、いつの日の、いかなる時にか、むまれいて、すみし宮こを、あくかれています、かかるとんと、いふせきしつるかや、屋にて、こけの戸ほそにとちられ、ともなふ人もあらはこそ、軒にはふなるくすの葉の、うらなくものをおもふ身を、などはかなしと、思ひ給はて(3才)、うちやり給ふことの、うらめしきよなと、かゝせ給ひて

かはかりに、はかなき身を、世の中に、をきてわひしき、露ときえはや

たゝならぬうき身をなと、おほしやらぬことこそ、ほいに思ひ侍らねなど、いとねたましけに、かゝせ給ふも、あはれなり

中將は、つくく御らんして、かくこそはあるへけれとおほして、中將は、この人と、心くらへをせんに、いつれか、思ひのおとり侍らむとよ、とかく、かきて、つく(4才)すへき事にあらすとて、御つかひを、ひそやかに、おはしまのもとへ、よはせ給ひて、かへしは、わざとなきそや、ちかきほとに、しのひて、わたりなんと、よくく申せとの給ひて、かへし給ふ(4才)

〔挿絵・第三図〕(5才)

そのうち、中將は、六位をめして、われ、かの玉水へ、うちこえむと、思ふなり、ちゝ大臣殿、御ようの御ことあらは、心さしありて、すみよしへまふてけるよしを、よくく申せと、の給へは六位は、うけ給はりて、ちかきほとに、御節会のおはしますに、御やくをかゝせ給ふな、いそきくかへらせ給へとそ、申ける中將は、わらは、たゝひとり、つれさせ給ひて、あさまきに、い給はんと、したまひけるか
おりふし、主殿のつほねは、きたりて、いかにや、このほとは、う

への御ことのみしけ(5ウ)くて、こゝろなから、まいり侍る事もさふらはす、まんところのおほせには、中将殿、なにとありけるやらん、御こゝろむつましけに、明くれみえ給ふこそ、いと心もとなけれ、いかなることをかやみぬるそや、よく／＼たつねてこよと、の給ひしなり、けにと、おほしめしけるそや、かの君の御ことにのみ、御心うつさせ給へは、よろつにうとくこそ、おはすらめと、思ひ侍るそやと、聞えければ

中将、聞しめして、されはこそ、今むかへる人を、心におもひそめねは、よろつにつけて、ものゝけ(6オ)ちめ、みえ侍るそや、かね／＼、御身か、しれることく、むかへぬるとも、いかてか、ことのすなはなるへき、いみじきことは、いてこそして、おかしきことのみ、いやまさりなんと、おもひしに、たかはざるそや、たゞ、わかねかひは、日ころ、むつひし人を、むかへて、めやすく、かしつかはやとのみ、おもへは、よろつに、うとくなりて、人にも、にくさけに、おもはるゝそやと、のたまへは

とのも、うちぎゝて、うへ／＼の御はからひの、ひめきみを、いくほともあらず、みすて給ひなは、いかて、御ためよかるへき(6ウ)、こゝろなかく、ものし給ひて、よき時節をとり、いかやうにもしたまへと、申ければ(7オ)

〔挿絵・第四図〕(7ウ)

中将、きゝ給ひて、これみよ、文こしさふらふか、みるよりあはれに思ひて、こらへつへうもなければ、けふは、しのひてこそはやと、もよほし侍るそやとて、御文とりて、とのもにみせ給へは主殿、つく／＼とみたてまつりて、あはれにそぎ／＼ける、けにも、御ことほりにこそ、かく、おほしつゝくるもいたはしく、とかく、

御身の、こゝち、むすほゝれ給ふも、御ことほりそやとて、なみたをともになかかしける

ちうしやう、の給ふは、かの人へ、こしたて侍るへし、やかて、かへりこんと、の給へ(8オ)、主殿も、むかへさせ給ふ

ひめ君も、何とやらん、御こゝちあしとて、丁の内におほしけるよし、政所のおほせにてりおはしまして、なかめかちにおはしけるよし、政所のおほせにてさふらふそや、とき／＼は、おはしまして、打かたらひて、したしみ給へ、たかきもひくきも、女は、ひとつ心にて、おつとの、もた

する心にて侍るそやと、うちあて、聞えけるもかしこし

中将、うなつき給ひてければ、とのもは、とくして、かへりにける(8ウ)

〔挿絵・第五図〕(9オ)

其のち、中将殿は、わらはひとり、御ともにて、しのひやかに、くたり給ひけるか、ほとなく、おはしつきて、いつちにてかあるらんと、このもかのもを尋ね給ふか、ある沢へに、あやしけなる女の、わらは二三人、草の葉をつみをりけるに、かう／＼ある人やあるらん、をしへよと、の給ひければ、かしこまり候とて、中将とのゝ、さきに立て、あゆみけるか、ほとなく、是に候とて、かへりぬ

中将、つく／＼とみ給ふ、まことに、あやしきかやはらのおくに、

いさゝかしつらひたるか、軒は、つたかつらの、くち(9ウ)葉なるか、はひまとはりて、いとものあはれなるに、小柴垣のあみ戸をゝしあけて、たれか有よと、申させ給へは

めのと、中将とのゝ御ことと聞より、ついたちて、あら、めつらしの御入やとて、ひめきみそかくと、申ければ

ひめ君は、さしいて給ひて、中将とのと、み給ひしより、まつ、は

らくとそ、なかせ給ふ(10才)

〔挿絵・第六図〕(10ウ)

〔挿絵・第七図〕(11才)

中将も、ひめ君の御すかたを、御らんして、御泪くみ給ふ、めのとは、御手水をとりにて、御あしをすまして、そのうち、座につかせ給ひて

いかにや、御身のことのみ、かた心に思ひこちて、夢にもうつゝにも、わするゝことはなきそとよ、女御、ちゝ大臣とのゝ、御はからひにて、人をむかへて侍れとも、さらに、心もうちとけず、うちかたらふ事もなければ、この人も、いさめるこゝちもおはせず、ただ、つれづれにて、心ちもにこりてみえ侍るそや、なかき夜のめさむるおりは、ありし(11ウ)むかしのむつことを、おもひいてゝ、ひとり、なみたにうちむせふありさまは、まくらよりほか、しる人もなきそやと、さめゝとなき給へは

ひめきみは、日ころのちぎりにたかひて、おりゝのふみたに、給はらぬことの、うらめしきよ、あたらしき人を、うちかたらひ給へは、うつれはかほる、うき身のならひなれば、なげくへきにしもあらねとも、ひとりおはするおやを、ふりすてて、かやうに、いふせき住めをなせしも、たれ(12才)ゆへそや、ひとへに、御身とちきりしゆへに、かくなり行と、おもへは、うらみは、ことさらのころそや(12ウ)

〔挿絵・第八図〕(13才)

たゝならぬ身にしあれば、一かたならぬおもひにて、とにもかくにも、みやこのことのみ、思ひいたさぬおりもなく、なみたのたねのみ、つくせるを、おほしやらぬもうらめしやと、かきとぎ給ふ

も、ことほり也

さては、ちうしやうも、わか方(たご)さなにて、思ひくらせるも、いかてか、御身におとり侍らん、御こゝろやすくおもひ給へ、とくゝ、この人をゝくりまいらせて、わか御所へむかへて、めやすくあらせたてまつるへきそや、さんは、いつなるらん、うしろめたくこそおもひ侍れと(13ウ)、のたまへは

くる月ころと、おほえ侍ると、の給へは

さもあるならば、めのとよ、はやく、わかかたへ人をこし候へと、いとわりなくぞ申させ給ふ

かくて、こゝにおはして、たかひに、あたくらへまじゝて、山里の、いとあはれなる事からを、なかめくらし給ひけるに、しつかしわさの、あさゆふに、やすらかなる事もなく、わひしけなるふせいを、み給ふにつけても、うき世のありさま、はかなく(14才)、あはれにそおほしける

中将との、月ころ、おほしめしかぬ中なれば、一日二日と、くらし給ふか、あかすかなしくおほして(14ウ)、はなれもやらせ給はず、しはし、こゝにておはしける(15才)

〔挿絵・第九図〕(15ウ)

〔挿絵・第十図〕(16才)

さるほどに、みやこには、大臣の御節会おはしけるにつみて、この中将との、内弁のやくに宣下せられけるに、おはせさりければ、大臣との、すみよしまふてと、きゝしか、いつちへか行つらんと、六位をめして、御たつねありければ

われらも、さやうにうけ給はり侍ると、申す

大臣殿、今宵の内弁、つとめはつれ候は、宮このうちには、かな

ふましきにてあるそと、いからせ給ふ

されは、くきやう、殿上人、上達部にいたるまで、をのゝ座へうつらせ給ふか(16ウ)、中将おはしまさねは、ちからなく、新三位の中将、このやくをそつとめ給へりける(17オ)

〔挿絵・第十一図〕(17ウ)

〔挿絵・第十二図〕(18オ)

かゝるほとに、六位は、文かきて、玉水へ、いそぎ／＼わたらせ給へと、かきけれども、とみにもいてやり給はて、明る月のくれかたに、京へおはしけるほとに

父大臣殿、大きにいからせ給ひて、のりよしの判官を御つかひにて、中将、わか猶子として、その祖をまほりて、朝につかへたてまつるへき身の、世をないかしろにおもひて、みつからか心に、よろづまかせ侍ることの、つみ、いくはくそや、君より、中納言のせんし下さるれば、いなみたてまつるに、春宮女御より(18ウ)、わか子とむまるゝによりて、ふさいをはからひ給ふに、かたしけなしとおもひ侍らて、かたはらにうちやりて、ゆく多もしらす、こゝかしこ、さまざま事、節会の御やくを、かねてきゝなから、いつちへ行やらん、あとけちて、つとめさる事、われ、かゝるまつりことをうけ給はる身の、かはかりにけなきものを、みやこにきては、そのまつりこと、きよからす

君も、臣も、日ころのきりやうにちかひて、うときものとなりたるは、ひとへに、大臣かしわざなりと、申させ給ふは、ことほり(19オ)そや、さかなくも、うしろゆひをさゝるゝ事こそ、きつくわいなれ、すくに、流さいにさすへしと、いらなくおほせつけれはちからなく、中将殿にまいりて、このよしをくはしく聞えければ

(19ウ)

〔挿絵・第十三図〕(20オ)

中将、いさゝかもおとろき給はず、もとより、かくあるへしと、思ひまふけしみぢなれば、おとろく事はなきそかし、はい所はいつちなるらんと、とはせ給へは

はりまのくに、竹の岡とかや申ところへ、うつしたてまつれとの、御さたにて侍ると、申せば

今一たび、はゝまんところへまいりて、御目にかゝりたくおもへとも、かゝる身となれば、それもちからなしとて、一間所にいらせ給ひて、玉水の御かたへ、ふみ、こま／＼あそはして、六位に、これをたしかにとゝ(20ウ)けよと、なみたなからにわたし給へり、御母まんところへも、いま又、かたらひたまへる、ひめきみへも、御ふみ、まいらせ給ふ

すてに、判官らは、むまにて、けいこつかまつるへしとて、もよほしければ

中将との、六位をめして、おほせけるは、われ、かゝるなんと、なりゆく事も(21オ)、ひとへに、この女房ゆへなれば、ひたすらに、御へんをたのみ侍るそや、くる月ころには、さんをとくへし、男子ならば、なんち、心をそへて、わかかたみにおもひてそたてゝ、なき身とならば(21ウ)、法師にもなして、あととはせよ、文には、くはしくかきたるなど、こま／＼きこえさせ給ふも、あはれなり(22オ)

〔挿絵・第十四図〕(22ウ)

〔挿絵・第十五図〕(23オ)

御母政所は、ひとへに、ゆめのこゝちし給ひて、まことに、人にす

くれて、いみしき中将とて、うらやまれしものゝ、いかなるてんまのしやうけにてや、かゝるうき身とはなり行らん、たゞひとりある中将を、かく、させんのだひにまとはして、老の身の、あとにのこりて、はかなく、ものを思はんんことの、かなしさよとて、こゑもおします、なげかせ給ふも、あはれ也

さるほどに、中将殿、けいこのふしとも、かこまれて、さすらへのたひに、おもむき給ふそ、あはれなる(23ウ)、住なれ給ひしみやこを、いて給ふとて、かくそよみ給ひける

けふまでも、たひちにまどふ、われなれば、たひたつとも、おなしたひとは

かやうに、すさみ給ひ、いて給ふほどに、六位も、ひやうこのうらまで、をくりたてまつりける(24オ)

〔挿絵・第十六図〕(24ウ)

〔挿絵・第十七図〕(25オ)

それより、御舟にめされて、いそぎ給ふほどに、ほとなく、はりまとかやにも、つかせ給ふ、竹の岡のしゆこ人にあつて、人々は、みやこにかへりける

しゆこ人は、あたらしく家をつくりて、中将殿を入たてまつり、あさゆふにまいりて、かしつぎたてまつるを、み給へは、にくさげなるおのこの、ひなひたるか、たみたるこゑにて、ものきこゆるも、あいなきやうにはあめれと、又けう有てみえわたりける、ともなひ給ふ人もあらはこそ、いつしかの御あそひには、みやこよりもたせ給ふ(25ウ) 御琴をとりいて、ひきならしあそひたまふに、まこと、ひなのことなれば、これをする人もあらはこそ、たゞ、めつらかに、おもしろき事そとて、あやしのしつにいたるまで、みゝを

そはたてゝそ、きゝにける

こゝに、けんみつの二ほうをしゆしける、そうのありけるか、これをきゝて、このところのしゆこ人、有治の別所といへる人と(26オ)、うちつれて、中将へまいり、さこそゆゝしき宮この、くうてん、らうかくのうちに、おはしまして、かゝる、くさふかき西海のはてに、御いりさふらひて、さこそものうくおほしめしきふらはめ、御心のうちこそ、あはれには(26ウ) 思ひたてまつれとて、あさなゆふにまいりて、御つれゝをそ、なくさめたてまつりける(27オ)

〔挿絵・第十八図〕(27ウ)

〔挿絵・第十九図〕(28オ)

中将とは、うらはまのありさまをみはやと、おほしめして、この人々へ申させ給へは、うけ給はりて、御ふねをしつらひて、うちのせたてまつり、あみをおろさせ、海士にかつきさせなとして、ひめもす、あかしくらせ給ふ

ひるつかたは、かゝるあそひにて、うちまきはし給ふか、日もくれかたよりは、みやこの御かた、こひしくおほしめし、人しれぬ御なみたのみ、なかし給へり、中にも、玉水の御方(28ウ)、いかゞし給ひつらんと、おほしめして、夢になりとも、此人に、今一たひ、あはまほしとそ、おほしける(29オ)

〔挿絵・第二十図〕(29ウ)

〔挿絵・第二十一図〕(30オ)

さるほどに、六位は、玉みつへまいりて、姫君に、御文たてまつりければ、ひらきて、み給ふに
もとより、あふはわかれのはしめにし侍れば、なげくへきにはあら

ねども、持もひの外なる御かんぎを引けて、さいかいはてに、流しつき給へと、申ければ
人と成行身なるそや、すてに、みやこをいてしとき、今一たひあは
てと、いかばかりおもひしかとも、けいこのものふともにも、かこ
まれぬれば、ちからなく、六位によくくきこえけるそや、さん
とけさせ給ひて、なんしならば、わかいはんやうにし給ふへ(30ウ)

かねて思ひつゝけしは、御身をみやこへうつして、こゝろやすくあ
らせはやと、おもひし事も、いたつらになりぬることの、くちおし
さよ、かゝるうき身となりぬる事も、よくくおもへは、御身をふ
かくおもひしゆへに、よろつかきくれて、こゝちまとひ、世のわさ
もつとめ侍らて、かくうきなをなかし侍るそや、御身も、わか
うへ、わすれ給はずは、しゝたりとき給ひなは、のちの世をたのみ
侍るそやなど、かゝせ給ひて、おくに

玉のをの、たえずもあらは(31オ)、うき世にて、今ひとたひを、
ちきることの葉

と、あるをみたまひて、御かほにをしあてゝ、引かつきふし給ふ
(31ウ)

〔挿絵、第二十二回〕(32オ)

六位は、めのとにきこゆるやうは、御身も、たゝならずわたらせ給
へは、いたくなげかせ給ひては、さはりともなり給ふへし、これ
は、ひとへに、中將との、あまりにひめきみをおほしけるにより
て、御心をすくよかになをし給はんとての、御いましめと、きこえ
さふらへは、ほとなく、かへり給ふへし、そのおりふしに、わか
君、おとなしやかに、よういくおはして、みせさせ給はゝ、うきを
引かへて、ことたつことのあるへきそや、よくく、ひめきみをか

しつき給へと、申ければ

めのと、申けるは(32ウ)、今は、ほとはるかにおはしませは、い
かにおほしめすとも、中將との御たよりは、かたかるへし、けふ
よりは、御身を、中將とのとたのみ給はては、いかてかことの上す
かあらんと、いとあはれにきこえければ

六位は、これをきゝて、いまめかしきことをきくものかな、なには
につけて、それかし、あるうへは、心やすく思ひ給へ、中將とのに
つかうるも、ひめきみにつかふまつるも、おなしみちにて侍るそ
や、中將、かやうに成給ふことのかなしさは、ひめ君よりも、まさ
りて、心かなしく(33オ)侍れとも、いまさらせんかたなきそか
し、あはれ、わかおもひには、中將とのと御ともして、いつしか、
つかへ侍りなは、かはかり、ものはおもふまじと、これのみ、あさ
ゆふ思ふそやと、袖をかほにをしあてゝ、さめくとそなきにける
(33ウ)